

## 2010年度・研究旅行奨励制度【グループ旅行】

名 前	式町有加, 平野咲季	研究テーマ	ベトナムの今 ～フランスの植民地支配の光と影～
目的地	国 名	地域・都市名	
	ベトナム	ハノイ、ホーチミン	

### 研究旅行の目的

[動機] ベトナムはかつてフランスによる長年の植民地支配や戦争を経験してきたが、その一方で、現在でもフランス風の街並みが残り、観光地として栄えている。このように、アジアとヨーロッパの異文化衝突を経験してきたベトナムにおいて、植民地支配の痕跡はどのように残っているのか。また、当時どのような支配を受けていたのかについて関心を持ち、実際に現地で調査したいと感じた。

[目的] フランスによる植民地支配がベトナムに与えた正の面と負の面の両方から、現在も残るフランスの痕跡をさぐる。

- ・当時実際に使われていた収容所や複数の博物館などをひとつひとつ調査することで、植民地支配の残酷さや戦争の惨禍に触れる。(また、必要に応じて現地の人々にインタビューを行う。)
- ・ベトナムの街に残るフランス風建築はもちろんのこと、言葉、食べ物、習慣の中に今も残るフランス文化の名残に触れ、現地の人々がどのように異文化を受け入れてきたのかを知る。

### 期待される成果

- ・当時使用されたままの戦争兵器や拷問器具など、普段は倦厭したくなるようなものを積極的に見ようとする姿勢が、今後過去の事実を後世に語り継いでいくうえで重要であるとわかる。
- ・実際に現地で建築物や食べ物、文化などを通して異文化の融合や衝突を体験し、異文化を受け入れている姿勢をベトナムから学びとり、グローバル化に対応していく参考にする。
- ・今まで戦争や植民地支配などを支配する側の視点から見るが多かったが、被植民地側の視点から捉えなおすことで、違う角度から理解することができる。

### 旅行行程

旅行期間：2010 年9月7日～9月17日 [ 10日間 ]

	滞在地	行 動
第1日目 9月7日	ハノイ	福岡発(10:30)→ハノイ着(12:50)→旧市街(①)の街並み散策→ハノイ泊
第2日目 9月8日	ハノイ	歴史博物館(②)→市民劇場(③)→ハノイ泊
第3日目 9月9日	ハノイ	軍事博物館(④)→ハノイ大教会(⑤)→ハノイ泊

第4日目 9月10日	ハノイ	ホアロー収容所(⑥) → (インタビュー) →ハノイ泊
第5日目 9月11日	ホーチミン	移動日→ハノイ発→ホーチミン着→ホーチミン泊
第6日目 9月12日	ホーチミン	ホーチミン市博物館(⑦) →サイゴン大教会(⑧) →ホーチミン泊
第7日目 9月13日	ホーチミン	(インタビュー) →戦争犯罪展示館(⑨)→ホーチミン泊
第8日目 9月14日	ホーチミン	歴史博物館(⑩) →中央郵便局(⑪) →ホーチミン泊
第9日目 9月15日	ホーチミン	ホーチミン作戦博物館(⑫) →美術博物館(⑬) →ホーチミン泊
第10日目 9月16日	ホーチミン	中央郵便局→ホーチミン発(01:15) →機内泊→福岡着(08:00)

### 〈インタビュー〉

博物館や街並に関する調査だけでは分からない現地の人々の考え方を知るために、インタビューを実施した。植民地時代の名残の残る町を現地の住民はどのようにとらえているのかインタビューを行い、現代のベトナムの人々の意識を検証する。

### 【報告書・要旨】

今回の調査の結果、現在のベトナム（主にハノイ）には、多くのフランス風建築が残っており、今でも人々の住居や商店などとして使われていて生活の一部となっていることが分かった。また、看板などにもフランス語が使われていたり、食文化にもフランスパンを食べる習慣などが残っていたりして、フランスの名残が強く根付いていると感じた。一方、ベトナムには多くの戦争・軍事博物館があり、当時使われていた戦車や戦闘機が展示されていて、戦争大国であることを実感した。このように、暗い影が残るベトナムであるが、一方で、現在のベトナムの人々はフランスの名残とうまく付き合いながら暮らしていることが理解できた。

式町有加（グループ代表）



市民劇場（ハノイ）

## 1. はじめに

今回、私たちはベトナムのハノイとホーチミンを研究旅行の調査地を選んだ。研究調査の目的は、現在もベトナムに残る多くのフランス風建築、文化、習慣などを通して、かつてのフランス植民地支配が現在のベトナムに与えている影響の「光」と「影」を探るというものである。そして、さらにそこから現在ベトナムの人々がフランスの名残をどのように受け入れているのかを調べることにした。そこで、現在もフランスの名残が多く残る現首都ハノイと、旧都ホーチミンの二都市に絞り、調査を行うことにした。

当初、私たちはフランス植民地支配による「光」と「影」について、次のような予想を立てた。「光」の面としては、フランス風の街並みによって観光業が栄えていることや、パンや紅茶などの食文化の流入により生活が豊かになったことなどが挙げられると考えた。また「影」の面としては、フランスの植民地支配やアメリカによる戦争の惨禍が挙げられるとした。「光」の面については街並み散策や食・言葉を通して調査し、「影」の面についてはかつての収容所や軍事・歴史博物館を通して調べることにした。

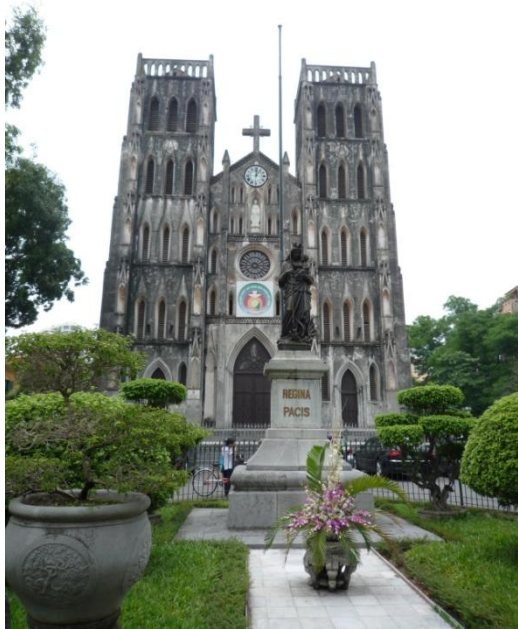
## 2. ハノイ

ハノイの街並みはほとんどの建物がフランス風建築であり、またベトナム語もアルファベットがもとになっていることから横文字の看板が並んでいる。カフェの看板などにはそのままフランス語で名前がつけられているものもあった。街にはカフェがたくさんあり、コーヒーやフランスパンはとて美味い。カフェを利用している客のたいは外国人観光客である。一方で現地のベトナム人たちは路上に洗面椅子のようなものを置いて座りこみ、麺類などの食事をとっている。このような光景はハノイではおなじみのものであり、いたるところで見受けられた。決して裕福な生活をしているわけではないが、毎日をいきいきと楽しそうに暮らしていることが伝わってきた。

### ● 光の面

ハノイでは、フランス風建築として観光地としても栄えている旧市街、市民劇場、ハノイ大教会を見て回った。旧市街は現地の人々も集うショッピングロードで、通りには左右にずらりと店が立ち並んでいる。また通りの奥には大きな市場があり、二階建てのフランス風の建物の中にはひしめくように沢山の店が入っている。街は全体的に臭く、ごみごみとしていた。

市民劇場とハノイ大教会はどのガイドブックにも載っている観光地であるため、外国人の姿も多かった。ゴシック建築の教会は尖塔が高々とのびており、正面の壁面には聖母像が設置してあった。教会の壁面が黒く汚れていることから、どことなくベトナムのほこりっぽさと結びつき、市民の生活に溶け込んでいるような印象を受けた。



▽ハノイ大教会

### ● 影の面

ハノイで見て回った博物館は、歴史博物館、軍事博物館、ホアロー収容所である。歴史博物館では先史時代から現在のベトナム民主共和国に至るまでの歴史が、順を追って紹介されていた。博物館の建物そのものも、1910年まではフランス領事館の総督の公邸として使用されていたという。私たちは歴史の中でも特にフランス統治時代（1883～1945）に着目した。1883年のフランスによるベトナム全土支配から、1945年のホー・チ・ミンによる独立宣言まで、事実上ベトナムはフランスに支配され続けていたのだ。展示物の中でも、私は当時使用されていた紙幣に関心を持った。紙幣には聖母像が描かれており、市民生活のすみずみまでフランスの支配が及んでいたことが読み取れる。

今回の研究旅行で最大の衝撃を受けた場所として、ホアロー収容所が挙げられる。ホアロー収容所とは、1896年フランス軍によりハノイの中心に建てられた刑務所のことである。当時フランスからの自由を訴え革命運動をしていたベトナム人たちを鎮圧し、収容していたのである。また、ベトナム戦争の際にはアメリカ人パイロットを収容するのにも使用された。現在ではハノイタワー建築のため大部分が取り壊され、その残りの部分が人々に公開されている。実際の建物の一部分であるとはいえ、その中は暗く空気はずっしりしていて、十分迫力が感じられた。

私たちがここを訪れた時には、ツアー団体とみられる多くの白人たちもいた。展示物の中でも目を引くのは、当時実際に使用されていたギロチンや独房などである。収容されたベトナム人たちは拷問を受け、精神的・肉体的にも追いつめられた。最終的にはギロチンにかけられ、その首は見世物として飾られたのである。私は実際に使われていた刑務所やギロチンを見るのは初めてだったので、その生々しさにひどくショックを受けた。その一方で、私たちのようなアジア人だけでなく、当時支配する側であった白人の人たちも、ツアーの一環としてホアロー収容所を訪れていることが非常にうれしく感じた。このように、過去に行われていた拷問や処刑の様子を公開し、世界のより多くの人々に知ってもらうことが、これからの世界を平和にしていくために重要

なことであると思った。



▽軍事博物館

### 3. ホーチミン

ホーチミンでは、ハノイとはまったく異なる光景が広がっていた。きれいに舗装された道路や大きな看板、コンビニ、高層ビルなど、ハノイには存在しなかったものが数多く存在し、ハノイに比べ近代化が進んでいることを実感させられたのだ。しかしその近代化の影には、戦争によって壊滅したホーチミンが一から街をつくり直したという事実がある。その証拠に、ヴィトンやグッチなどの有名店が並ぶ通りの路地を一步入ると、ハノイと同じような光景が広がっている。古びたカラフルなフランス風建築が立ち並び、人々は洗面椅子のようなものに座って路上で食事をしている、というあのおなじみの景色が目に入る。きらびやかな通りには観光客が多いものの、少し路地に入れば、ベトナムの人々が自分たちの生活を懸命に営んでいるのである。このように、ホーチミンでは急速に近代化が進む都市部と、昔ながらの生活を続けているベトナム人との二極化がはっきりと見てとれた。ここでも違う意味で光と影が存在していると感じた。

#### ● 光の面

ホーチミンでは、サイゴン大教会、中央郵便局、美術博物館を回った。まず驚いたのは、サイゴン大教会である、ハノイ大教会に比べはるかに洗練されており、壁はオレンジ色のレンガでできていて明るい。建物の中にも入ることができ、中ではミサも執り行われる。教会の前はロータリーになっており、その中央には聖母像が建てられている。ハノイ大教会と比較すると、手入れが行き届き大切にされているような印象を受けた。

サイゴン大教会のすぐ隣に中央郵便局がある。こちらもフランス風建築として有名で、天井はアーチ状になっている。一番奥の壁には大きなホー・チ・ミンの肖像画が飾ってある。郵便局としての機能も果たしているようだが、その大部分が観光化されており土産物屋になっている。



▽夜のホーチミン

## ● 影の面

ホーチミンで見て回った博物館は、ホーチミン市博物館、戦争証跡博物館、ホーチミン歴史博物館、ホーチミン作戦博物館である。

中でも最も印象に残っているのが戦争証跡博物館である。ここでは主にベトナム戦争のことを取り扱っており、実際に使用された武器や爆弾、戦闘機や戦車が展示されている。また、当時の写真や枯葉剤の被害を受けた胎児のホルモン漬けなども展示されており、私はそのリアルさに言葉を失った。この博物館を見て回っていると、ベトナムがいかに戦争による被害を受けてきたのか、また、その歴史のほとんどが戦争によって血塗られていることが分かる。実際に私は、ハノイとホーチミンで、枯葉剤による後遺症の障害を持つと思われる大人や子供を目にした。背中が歪曲していたり手足が曲がっていたり、立って歩くことができなかつたりと、いまだに戦争による被害を受けている人々が存在しているのである。仮に戦争が終わっても、枯葉剤の後遺症は何年経っても残り続け、今もベトナムの人々を苦しめている。博物館の入り口の隣には、戦争の後遺症を抱える人々が集い、音楽を奏でるなどして寄付金を募っていた。申し訳ないけれども、私は彼らを長い間直視することはできなかつた。見ずともその現状が、痛いほど、ひしひしと伝わってきたのである。

しかし、ここでも嬉しく思うことがあった。博物館を訪れている人の大半が白人だったのである。そして、写真や武器などの展示物を一つ一つ真剣に見て回っていたのだ。私はその光景を見て、これは戦争当時から考えると大きな一歩なのではないかと感じた。この戦争証跡博物館は、ベトナムの博物館の中では広く、展示内容も豊富で開放的なので、ベトナムを訪れる際にはぜひ足を運んで、世界の少しでも多くの人に見てもらいたいと感じた。

## 4. インタビュー

私たちは、「現在ベトナムにはフランス植民地支配の名残が数多く残っているが、そのことについてどう思うか」という問題について、現地の人々の生の声を聞くためにインタビューを行った。ハノイで一人にお話を聞くことができたので、紹介したいと思う。

● Le Nhu Ngoc (レ・ニュー・ゴク) さん 女性 (21 才 ・ 学生)

私たちはハノイでゴクさんにお話を伺うことができた。彼女は大学で日本語を勉強しており、来年から一年間大阪大学に留学予定とのことである。したがってインタビューは日本語で行うことができた。

**質問①**「今も残るフランスの名残をどう思いますか？」

**ゴクさん**「フランスの名残は、フランスの文化の一部というよりも、今はハノイの文化の一部になりました。“Ba Dinh District” (バー・ディン・ディストリクト) という地方にハノイの政治の中心部があり、建物がたくさんあります。その建物はほとんどがフランス建築で、とても綺麗です。」

**質問②**「ハノイにはカフェがたくさんありますが、これもフランス文化の名残ですか？」

**ゴクさん**「ハノイにはたくさんカフェがありますが、10 年くらい前までは、カフェはあまりありませんでした。近年、外国人観光客のためにたくさん建てられました。近年ベトナムが WTO に入り、外国の投資が増えて文化交流が盛んになりました。外国人観光客も増えて、若者の考え方も国際的になってきています。特に若者は、フランスやイタリアの文化に興味がある人が多いです。外国に対して柔軟に対応しています。なので、若者とお年寄りでは考え方に差があるかもしれない。」

**質問③**「フランスは過去ベトナムを支配してひどいことをしてきましたが、それについては嫌だと思わないのですか？」

**ゴクさん**「私は特にフランス建築に興味があり、私にとってそれは特別なことです。フランスはベトナムを植民地化したけれど、その中でベトナムに新しいことをたくさん教えてくれました。現在のベトナムの交通や駅などは、もともとはフランスから入ってきたものです。悲惨な過去があるのは少し嫌ですが、これらのことを考えるといいと思います。」

私は、同じ歳にしてここまで日本語で自国のことを熱く語ることができるゴクさんが、心底すごいと思った。流暢な日本語にも驚いたが、自国に対してこれだけ関心を持っていることに感心したのだ。そして意外だったのが、フランスの名残をプラスに受け止めているということである。ベトナムの交通や建物の作り方を教えてくれたのはフランスで、今もその教えが、ベトナム人に強く根付いているというのである。また、若者はフランスに対して「過去に自国を支配していた国」というよりも、もっとポジティブなイメージを抱いていることが分かった。むしろ、ヨーロッパに感心を持って、自ら吸収しようとする姿勢をもっている。今回話を聞くことができたのが同じ歳の若者だったので、お年寄りに話を聞けばまた違う結果になったのかもしれないが、現地の人々の貴重な話を聞くことができて大変参考になった。

[さいごに]

私は今回初めてベトナムを訪れて、たくさんの貴重な経験をする事ができた。まず言うことができるのは、ベトナムは戦争大国であるということである。その歴史の多くを戦争と歩んできている。どの博物館へ行っても戦闘機や戦車や機関銃がたくさん置いてある。ホーチミン作戦博物館ではスタンドグラスまでもが戦争の絵であり、衝撃を受けた。

しかしその一方で、ベトナムは成長の真っ最中であるとも言える。ハノイとホーチミンを見比べると、それは一目瞭然である。ハノイもいずれはホーチミンのように、ホーチミンもいずれは世界の大都市のように、どんどん成長していくのであろう。だがその過程でフランス建築や名残が消えていくのかと考えると、少しさみしいような気もする。インタビューに答えてくれたゴクさんのように、フランス建築に誇りを持ち、フランスの名残もベトナムの一部として残していくことも大切だと感じた。

今回の研究では「光」と「影」の両面から調査を行ってきたが、ベトナムに存在するこの二局面は切っても切り離せない関係であり、この二つの側面を合わせることはじめてベトナムという国になるのだと実感した。アジアとヨーロッパの異文化衝突を体験してきたベトナムであるが、現在では、その衝突のいい面も悪い面も融合して、すべて受け入れて暮らしているのである。この異文化を受け入れている姿勢を私たちも学び取り、今後の世界平和やグローバリゼーションに対応していく参考にすべきではないだろうか。